

## 時、条件の副文を導入する *sô*, *als(ô)* について

長 縄 寛

### 0. はじめに

今日のドイツ語では、*so*は「そのように、それほど」といった意味の様態の副詞として、*also*は述べられた事柄を要約して「つまり、従って」といった意味で接続詞的な副詞として用いられるのが最も一般的である。これに対し、*als*は「～した時」という意味の従属接続詞としての用法がまず頭に浮かぶだろう。しかしその語源をたどると、*also*や*als*は*so*の前にその意味を強める強調の*al*が付加されたものであり、本来 „*ganz so, ebenso*“ といった*so*の強めの意味を持っており、古高ドイツ語（以下Ahd.）でも依然として*alsô*は*sô*の強めの意味を持っていた（一部にはすでにAhd.期の*alsô*にも時の意味が認められるようであるが<sup>1</sup>、まれな用法である）。一方、Ahd.の*sô*は様態の副詞と並んで副文の導入詞（wie「～のような」）の機能でも用いられた。そしてこの様態の従属接続詞の用法から発展し、時（今日の „*als*“）や条件（今日の „*wenn*“）の意味で、さらにはまれに因由の意味（ „*weil*“）で用いられることもあり、Ahd.の*sô*は実に多義、多機能であったと言える。しかし、これらの用法の中で最も一般的なものはやはり様態の意味である。また、過去形と結びついて、過去の一回的事象を述べる時の従属接続詞としての用法も数多く見られる。従って*sô*は、Ahd.期に同じく時の従属接続詞として頻繁に用いられた*thô*と競合することになった。

中高ドイツ語（以下Mhd.）期には*sô*の意味が強められた*alsô*や、その語末音が消失した*als*も様態の副詞、あるいは接続詞として多用され、一部にはAhd.期の*sô*から受け継いだ条件や時の接続詞として用いられることもあったが、時の接続詞として最も一般的であったのは、Mhd.にお

---

1 Vgl. Dal, S. 213

いても *dô* (<ahd. *thô*) であり、条件の接続詞としては *ob* である。従って Mhd. 期の *sô*, *als* (*ô*) は概して様態の意味で用いられ、条件や時の意味で用いられることは比較的まれであった。しかしそういった数少ない証例を収集し、互いに比較すると、それぞれの語の間に用法上の揺れは存在するものの、その用法に一定の傾向があるように思われる。本稿ではまず、Ahd. の *sô* が時、条件の接続詞としてどのように用いられていたのか概観し、その機能が Mhd. の *sô*, *alsô*, *als* にどのように受け継がれ、それぞれの語にどのような機能分化の傾向が見られるか示してみたい。なお、考察の対象として取り上げるのは、Ahd. に関してはオトフリトの『福音書』、Mhd. に関しては『ニーベルンゲンの歌』 *Nibelungenlied* とハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue) の『イーヴァイン』 *Iwein* である。

## 1. 古高ドイツ語における時、条件の従属接続詞 *sô*

*sô* は本来、指示する機能と様態の意味を兼ね備えた副詞で、先行する文全体、または個々の文成分を前方照応的 (anaphorisch) に指示して「そのように」といった意味で用いられた。

- (1) *Iuan fiant minnôt, sô gibuutit druhtîn got; (O. II 19, 15)*

汝の敵を愛しなさい、主なる神はそう命じている。

(下線は筆者、以下同様)

このように *sô* は様態の意で用いられるのが本来的な用法であったが、先行する文中で述べられた出来事との時間的な連続性を表わして、「それから」 (=nhd. „dann“) といった意で用いられることもあった。

- (2) *Was siu after thiu mit iru sâr thrî mânôdo thâr;*

*sô fuar si zi iro selidôn mit allên sâlidôn. (O. I 7, 23f.)*

その後、彼女 [=マリア] は三ヶ月の間エリザベトとともに過ごし、それからあらゆる幸福に満たされて自分の家へ帰った。

*sô* によって様態を示された文あるいは文肢に、同定の内容を具体的に

時、条件の副文を導入する *sô*, *als(ô)* について

示す文が付加され、その文にも同じように *sô* が置かれた。この *sô* がやがて次の例のように副文の導入詞となるのである<sup>2</sup>。

- (3) *Duet ir ouh sô, sô ther duit, wanta ir ni wizut thia zît; (O. IV 7,61)*  
あなた方もその人がするのと同じようにしなさい。  
なぜならあなた方はその時を知らないからです。

このようにして *sô* によって導入された副文は、様態だけでなく時を表わす文にも用いられ、過去における同時性 (nhd. „als, alsbald“) や前時性 (nhd. „nachdem“) 、現在、未来における同時性、さらに条件 (nhd. „wenn“) を表わす意味へと広がっていく。エールトマン (O. Erdmann) は、副文中の動詞が直説法現在の場合、純粹に時の意味で用いられる *sô* はオトフリトでは3例のみであり、その他の箇所では条件の意味で用いられる<sup>3</sup>、と述べている。以下に示す例はそれぞれ、例(4)が過去における同時性、例(5)が現在(内容的には未来)における同時性、例(6)が条件を表わす *sô* の例である。

- (4) *Sô si in ira hûs giang, thiu wirtun sia êrlîcho intfiang,  
joh spilôta in theru muater ther ira sun guatêr. (O. I 6, 3f.)*  
彼女 [= マリア] が家に入ると、家の主人は彼女を丁重に迎え、  
彼女の胎内で偉大なる子がおどった。
- (5) „ih irstantu“, quad er zi in, „*sô* ih thritten dages tôtêr bin.“  
(O. IV 36, 8)

イエズスは彼らに言った、「私は死んで三日目に復活する」。

- (6) *Ni tharf es man biginnan, sô er sih biginnit belgan,  
er wergin sih giberge fon sînemo âbulge. (O. I 23, 39f.)*  
神が怒り出したら、神の怒りから逃げて  
どこかへ身を隠そうなどとしてはならない。

---

2 Vgl. Behaghel III, § 990.

3 Vgl. Erdmann: *Untersuchungen I*, S. 119.

例(4)では、一行目前行のsô文中で直説法過去のgiangによって、過去の一回的事象が述べられる。例(5)では、後半のsô文中の動詞はbinという直説法現在の形であるが、“ich werde auferstehn, wenn ich am dritten Tag tot sein werde” とエールトマンが訳しているように、内容的にはthritten dagesという副詞的2格が未来における時点を表わしている。例(6)では、直説法現在のbiginnitとともにsô文は条件の意であると考えられる<sup>4</sup>。通常はしかし、過去の一時点を示す例(4)のようなケースでは次の例(7)のようにthôが、例(6)のような条件文では例(8)のようにobaが用いられる。

- (7) Fand er after thiu then man, thô er in thaz hûs quam,  
thâr ther liut io betôta, ginâda gotes thigita. (O. III 4, 43f.)

その後彼[=イエズス]は、人々が神の恵みを求め、  
祈り続けていた神殿に入ると、その男を見つけた。

- (8) „Thih deta ih mithont“, quad er, „wîs, oba thû giloubis,  
thaz thû gisihis gotes kraft joh selben druhtînes maht.“  
(O. III 24, 85f.)

彼[=イエズス]は言った、「あなたがもし信じるなら、  
神の力、主の全能を見ると前に知らせておいたではないか。」

例(7)では、一行目後半のthô文中の動詞は直説法過去quamであり、例(4)のsô文とまったく同じ意味、同じ機能で用いられている。例(8)においても直説法現在giloubisとともにobaは条件文の導入詞である。ヴンダー(D. Wunder)によれば、thôによって導入される時の副文(Temporalsatz)がオトフリトには77例、obaによって導入される条件文(Konditionalsatz)が99例見られ、いずれも極めて頻繁に用いられた導入詞であったことが

4 ただし、sô文中の動詞が過去形の場合にもまれに条件の意味で用いられることがある。

Sô sih thaz altar druag in wâr thanan unz in zuei jâr,  
sô wît thaz gewimez was, ni firliazun sie niheinaz.

年齢が二歳に達していなければ、 (O. I 20, 7f.)

その地区の子供たちを誰一人容赦しなかった(皆殺しにした)。

窺える<sup>5</sup>。また、例(5)のように現在、未来の時点を示して „wenn“ 「～する時に」の意で、あるいは例(6)のように *Konditionalsatz* の導入詞として用いられた *sô* は 23 例見られ、*oba* と比較するとそれほど頻繁ではないが、*Temporalsatz* の導入詞として用いられた *sô* は 91 例と最も頻繁であり、これほど数多くの例が見られるのは注目に値する。しかし本来様態の接続詞<sup>6</sup>として用いられた *sô* は、いったいなぜこれほどまで頻繁に時の接続詞としても用いられるようになったのだろうか。また、いったいどのようにして時の接続詞への機能転換が可能になったのであろうか。

ピーパー (P. Piper) やケレ (J. Kelle) の辞書によれば、*als* の意で用いられた *sô* の例は 88 例<sup>7</sup>、 „wenn“ の意の *sô* は 19 例<sup>8</sup> 挙げられているが、上で挙げた例(4)から(6)のように、*sô* 文を受ける相関詞が置かれないケースは比較的少なく、例(4)のような過去の事柄を述べるケースでは副詞 *thô* が主文中に (あるいは副文中に) 置かれることが 88 例中 52 例と非常に多い。この *thô* に関してヴンダーは、*sô* 文中で述べられた出来事の過去の性格を強調する機能を持つ<sup>9</sup>、と述べている。また *thô* の代わりに同時性を強調するのに *sâr* (nhd. „sofort“) や *êrist* (nhd. „zuerst“) が用いら

5 Vgl. Wunder, S. 426f. オトフリトでは、*Konditionalsatz* の導入詞として *oba* が最も頻繁に用いられていたようである。

6 ヴンダーによれば、様態文の導入詞としての *sô* は 233 例であり、やはり最も頻繁である。

7 Vgl. Piper, S. 434; Kelle, S. 547b - 550b. ヴンダーでは、該当箇所がすべて網羅されているわけではないので、例数に若干の差はあるが、ここではこれらの辞書に従った。ピーパーの辞書では „als“ の意の *sô* が 88 例 (91 例挙げられているが、III 24, 73 と IV 18, 10 は該当する *sô* が見当たらないため全部で 89 例とすべきである。また恐らく I 13, 7 は 13, 9、III 7, 11 は 7, 21、III 11, 17 は 11, 16、IV 3, 17 は 2, 17 の誤りである) 挙げられている。そのうち *sô slium(o)* の 8 例 (II 14, 85. III 4, 30. III 14, 10. III 14, 58. III 24, 110. IV 16, 41. IV 17, 26. V 7, 43.) を除いた 81 例に、ケレの辞書にのみ挙げられている 7 例 (I 14, 18. I 16, 21. III 16, 5. IV 7, 51. IV 18, 35. IV 26, 15. V 13, 31) を加え全部で 88 例とする。

8 ピーパーの辞書では „wenn“ の意の *sô* の例が 17 例挙げられているが、I 23, 41 では該当する *sô* なし。また、このケースに該当すると思われる *sô* が *sâr sô* の項目にも IV 26, 52. V 20, 36. V 20, 38 の 3 例挙げられているため、19 例とした。ちなみに IV 3, 32 は 2, 32 の誤りである。また、ケレにのみ挙げられている „wenn“ の意の *sô* はない。

9 Vgl. Wunder, S. 54.

れることもある。以下にそれらの例を示してみよう。

- (9) Sô sie thâr thô gâzun, thie thâr mit imo sâzun,  
mit selb druhtîne, thie liebun drûta sîne,  
Quad thô druhtîn selbo sus: „minnôst thû mih, Pêtrus? (O. V 15, 1-3)  
彼と一緒に、つまり主ご自身と一緒に座っていた彼ら、  
主の愛弟子たちが食事をしたあと、主ご自身がこう言われた、  
「ペトロよ、お前は私を愛しているか」と。
- (10) Quam engil ein in gâhî fon himilríches hôhî  
er walzta thana sâr then stein, sô er nan êrist birein. (O. V 4, 25f.)  
天の高みから突然一人の天使が降りてきて  
墓石に触れるや否や、たちまち石を脇へ転がしてどけた。

例(9)では、sô文が前置され、三行目の主文中のthôと相関的に用いられ、sô文中に置かれたthôが過去の意を強調している。また一行目前行最後の gâzunはケレによれば、過去完了の意 (gegessen hatten) であり、従って sôは前時性を表わす „nachdem“ の意である<sup>10</sup>。例(10)では sô文が後置され、それを前の sârが先取りし、sô文中の êristによって同時性が強調されている。sâr sô êristで”sofort sobald”の意味である。

こういった構文がオトフリトで数多く見られるのは、本来 sôが様態の意味であったということと恐らく関係していると考えられる。sôによって導入された副文が様態の意味ではなく、時の意味であるということがこれらの語によって示されるのである。こういったケースは、次の例のように、本来場所の副詞であった thârが関係代名詞に添えられ、その意味、機能を補助するケースに対応していると考えられることができるかも知れない<sup>11</sup>。

10 Vgl. Kelle, S. 191a

11 ベハーゲル (O.Behaghel) は、thôや thârによって主文と副文に共通の状況が示されるケースとして例(9)の箇所を挙げ、こういった用法は関係代名詞に付加された thârの場合と関連していると述べている。(Vgl. Behaghel III, S. 715f. § 1358.)

時、条件の副文を導入する *sô*, *als(ô)* について

- (11) *Thie sceidit er in wâr mîn iagiwedardhalb sîn,*  
*sô hirti, ther thâr heltit joh sînes fehes weltit. (O. V 20, 31f.)*  
羊を飼い、その番をしている羊飼いのように、  
彼はまことにその人々を自分の両側により分ける。

二行目前行の関係代名詞 *ther* に添えられた *thâr* は、本来場所の副詞であるが、チルヒ (F. Tschirch) は、*thâr* にあった文中でのアクセントが次第に失われることによって、*thâr* に内在した文を結合する力が指示代名詞へと移行し、これによって真の関係代名詞が生まれた<sup>12</sup>、と述べている。この仮説についての真偽は明らかではないが、*thâr* や *thô* に内在する指示性によって二つの文を互いにより強固に結び付けるという共通の機能をこれらの語が持っているように思われる。

次に時の“*als*“の意味に分類されている *sô* が *sliumo* を伴う例をみよう。

- (12) *Sô sliumo siu gihôrta thaz, firwarf si sâr io thaz faz,*  
*îlta in thia burg in zên liutin, sagêta thiz al in. (O. II 14, 85f.)*  
彼女 [= サマリアの女] はそれを聞くと、すぐに水がめを投げすて  
急いで町へ行き、人々にそれをすべて話した。

この例の *sô sliumo* は本来 *sô sliumo sô* という三語の結びつき (*so schnell wie* の意) であり、*sô sliumo* までは主文の成分であった。従って一つ目の *sô* は本来 *sliumo* にかかる様態の副詞であったと考えられる。そして、次第に主文の最後から副文の先頭へと *sô sliumo* が移動することによって全体で一つの接続詞と捉えられるようになったのである<sup>13</sup>。例(12)のように副文が前置され、二つ目の *sô* が欠けるケースでは、現在の“*alsbald*“のように、すでに全体で一つの接続詞と捉えられていたと考えられようが、ここでは *sô* 自体に時の意味が認められるケースと区別すべきであるため、それぞれの語の意味を厳密に区別し、*sô* を様態の意とみたい。

---

12 Vgl. Tschirch I, S. 180.

13 Vgl. Behaghel, S. 273f.

このようにAhd.では、sôが多義、多機能であるがゆえに他の語とともに用いられ、その機能、意味が強化された。そしてMhd.に至ると、これら様々な機能がalsô, also, alsなどの語に受け継がれていくのであるが、次章ではそれぞれの語がどのような機能を受け継いだのか、また、その際どのような用法上の揺れを生じ、次第に機能分化していくのか示してみたい。

## 2. 中高ドイツ語のsô, als(ô)

Mhd.では、sôにその意味を強調するalが結びついたalsô、その末尾音ôが弱化したalso、さらに語末音脱落 (Apokope) によってalsなどの語形が生まれた。ベハーゲルによれば、alsôはalとsôの融合 (Zusammenrückung) によって生まれたものであるため、本来sôの強めの意 („ebenso, ganz wie“) であったが、次第に個々の部分の意味が失われ、アクセントが弱い場合にはalso, alsとなり、多くの場合sô、特に従属のsôと完全に等価となった<sup>14</sup>。しかし、Mhd.ではsô, alsô, also, alsがそれぞれ常に置き換え可能である訳ではなく、sôに本来備わっていた様々な機能が、用法上の揺れを示しながらも次第にそれぞれの語に固定化されて行く傾向を窺うことができる。例えば、時や条件の従属接続詞としてのsô, als(ô)に関して、ダールは、Mhd.のsôは同時性を表わす時の接続詞、あるいは条件の接続詞として用いられる一方、als(ô)は概して一般化するswenne「～する時にはいつも」と同じ意味であり、今日の„als“の意味 (mhd. dô) で用いられることはより稀である<sup>15</sup>と述べている。また『イーヴァイン』や『ニーベルンゲンの歌』ではalsoはすべて様態 - 比較の意であり、時の意味で用いられる例は見られない<sup>16</sup>。こういったことから、すでにMhd.において一定の機能分化の傾向を示していたことが窺える。

14 Behaghel, S. 66f.

15 Dal, S. 211, 213.

16 そもそもalsoの用例数は極端に少なく、『ニーベルンゲンの歌』では1箇所(1126,1)、『イーヴァイン』でも3箇所(5970. 6121. 7972)のみである。Vgl. Benecke: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein*, S. 5; Bartsch: *Der Nibelunge Nôt*, S. 9.

では、はじめに sô の例から見ていこう。Mhd. の sô は、概して今日の „wenn“ の意で用いられる。『イーヴァイン辞典』には、「時」に関連付けられた sô の用例が 16 挙げられている<sup>17</sup>。 „wenn“ の意味で用いられるのはそのうち 14 例<sup>18</sup>であるが、過去形と結びついて過去における一回限りの出来事を表わし、今日の „als“ の意で用いられる例も 2 例<sup>19</sup>見られる。次にそれぞれ一例ずつ示してみよう。

- (13) sô diu katze gevrizzet vil,  
zehant sô hebet sî ir spil:  
herre Îwein, alsô tuot ir. (Iw. 823-5)  
猫はたらふく食えば  
すぐにじゃれ始める。  
イーヴァイン殿、あなたもそれと同じだ。
- (14) sô sî wider ûf gesach  
und weder gehôrte noch entsprach,  
sone sparten ir die hende  
daz hâr noch daz gebende. (Iw. 1327-30)  
彼女は再び我に返った時、  
聞くことも話すことも出来ず、  
自分の両手で容赦なく  
髪や髪飾りを引きむしった。

例(13)では一行目の gevrizzet という直説法現在とともに、条件文の導入詞として sô が用いられているのに対し、例(14)の sô は直説法過去の gesach とともに今日の „als“ の意で用いられている<sup>20</sup>。例(14)以外のもう

---

17 Vgl. ebd. S. 214f. 『イーヴァイン辞典』では sô, als(ô) とともに、意味上の分類としては様態と時の二つのみであるため、条件や認容のケースは後者に分類されている。

18 例(13)の他に 878, 943, 1068, 1525, 1986, 2476, 2708, 3099, 3856, 4415, 6969, 7074, 7388.

19 例(14)の他に 1339.

20 Vgl. Behaghel, S. 287. ベハーゲルはこの箇所を、主文に対して一度限りの時間的な前提が述べられるケースに分類している。

一箇所も、sôは直説法過去とともに„als“の意である。クラーマーの訳でも例(13)は„wenn die Katze viel frißt“となっているのに対し、例(14)は„als sie wieder zu sich kam“である。

『ニーベルンゲンの歌』の辞書では、sôによって導入された副文が時や条件を示すケースは全部で34例見られるが<sup>21</sup>、そのうち直説法過去とともに„als“の意になるケースは1例のみであり、その他の箇所では、条件文の導入詞として、あるいは一般化、反復の意(mhd.swenne)で用いられている。次にそれぞれ1例ずつ示してみよう。

- (15) sô si gedâht' an Helchen, daz tet ir inneclîche wê. (NL. 1161, 4)  
ヘルヒェのことを思い出して、彼女は心から悲しんだ。
- (16) Sô ie die kûnege rîche riten in ir lant,  
sô muosen ouch die recken mit in al zehant. (NL. 137, 1f.)  
貴い王たちが領地を見回るときにはいつでも  
武士たちも付き従わねばならなかった。

例(15)をグロッセ(S. Grosse)は„Wenn sie an Helche dachte, tat ihr dies innerlich weh“「ヘルヒェのことを思い出した時には(いつも)心が痛んだ」と訳しているが、この訳は不適當であろう。ここは、リュエデゲールがエッツェルの使者としてクリエムヒルトへの求婚のためにブルゴントの国に行く旨を、妻のゴテリントに伝えさせた場面である。彼女は夫の使者からその話しを聞き、やさしかったヘルヒェを思い出して、悲しい気持ちに陥るところだから、このsôは一回きりの時を表わし”als”の意味である。Ih写本では冒頭のsôがdo<sup>22</sup>と置き換えられている。一方、例(16)では一行目が„Wenn immer die mächtigen Könige in ihr Land ritten“と訳されており、ieはsôの一般化の意味を強調するものであると捉えられている。またC写本では、冒頭のsô ieがswenneとなっていることから、ここは反復の意味である。

次に、sôにその意味を強調するalが結びついたalsôについて見てみよう。時を表わすalsôとして『イーヴァイン辞典』に挙げられているのは、

21 Vgl. Bartsch: *Der Nibelunge Nôt*, S. 284.

22 Vgl. Batts, S. 353.

以下に示す例(17)の箇所のみである<sup>23</sup>。

- (17) und alsô schiere do in ersach  
diu eine vrouwe von den drin,  
dô kêrte sî über in  
und sach in vlizeclîchen an. (Iw. 3368-71.)  
そのうちの一人の婦人が  
彼を見るや、  
彼の上に屈み込んで、  
彼を注意深く観察した。

しかしここでは、*alsô* 自体に「時」の意味が備わっていると見るのは少々問題があるように思われる。ここはすでに前章で述べたオトフリトの例(12)に相当する表現であり、本来は *schiere* のうしろに来るべき接続詞 *sô* の代わりに *do* が用いられた用例であり、*alsô* は様態の意味である。例(18)はうしろに *sô* を伴った本来の形であり、Mhd. の文法書には例(17)と(18)の箇所は同じ *alsô* の用法として挙げられている<sup>24</sup>。『イーヴァイン辞典』でもこの *als(ô)* は様態の意味として分類されている<sup>25</sup>。

- (18) des enist zwîvel dehein,  
als schiere so er des strîtes gert,  
ern werdes vür mich gewert. (Iw. 916-18)  
彼が決闘を願い出ればすぐに、  
私より先に彼にそれが許されることは  
疑いの余地がない。

『ニーベルンゲンの歌』における *alsô* は全部で 14 例<sup>26</sup> 見られるが、  
„wenn“ の意味で用いられる例は 1 例のみであり、他の 13 例ではすべて

---

23 Vgl. Benecke: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein*, S.6.

24 Vgl. Paul/Mitzka § 353, 9 Anm.

25 Vgl. Benecke: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein*, S. 5.

26 Vgl. Bartsch: *Der Nibelunge Nôt*, S. 11. 2307,1 は重複しているため、14 例とした。

過去形と結びついて„als“の意で用いられる。次に示す例は(19)が条件の„wenn“、(20)が時の„als“の例である。

(19) Sô jehet ir vor den gesten, daz ir und iuwer man  
wellet herverten. alsô daz ist getân,  
sô lobt er iu dar dienen; des vliuset er den lîp. (NL. 875, 1-3)  
するとあなたが客人たちの前で、家臣たちと出陣すると言って  
下さい。そうなれば、彼[=ジーフリト]はあなたに仕えて出陣する  
ことを約束するでしょう。その結果、彼は命を失うのです。

(20) Si bat den ritter edele mit ir dannen gân  
in den palas wîten. alsô daz wart getân,  
do erbôt man ez den recken mit dienste deste baz.  
彼女[=プリュンヒルト]はその高貴な騎士に (NL. 469, 1-3)  
広大な宮殿に一緒に行くよう頼んだ。

それがなされた (=宮殿へ行った) とき、  
勇士たちはそれだけいっそう懇ろにもてなされた。

グロッセは(19)の二行目後行から三行目前行の部分を„Wenn das geschehen ist, so verspricht Euch Siegfried bestimmt seine Hilfe“と訳しているのに対して、(20)では„Als dies geschehen war, erwies man den Gästen um so größere Aufmerksamkeit“としている。三行目冒頭にalsôの副文を受けるdoが置かれていることからしてもここは„als“の意である。もう一つ„als“の意味の例を示そう。

(21) Alsô meister Hildebrant der wunden enpfant,  
dô vorht er schaden mêre von der Hagenen hant:  
(NL. C2367, 1f.)

老雄ヒルデブランドが負傷したと感じたとき、  
彼はハゲネの手でさらに傷を受けるのを恐れた。

ここでも例(20)と同様Alsôで導かれる文が二行目先頭のdôによって受けなおされ、またA、B写本では冒頭のalsôがdôと置き換えられていること

からも、alsôは明らかに„als“の意である。したがって、「als(ô)は一般化、反復のswenneの意味で用いられることが多く、今日の„als“の意はまれである」というダールの見解は、『ニーベルンゲンの歌』におけるalsôに関する限り妥当ではない。

では最後にalsôの語末音消失によって生まれたalsについて見てみよう。『イーヴァイン辞典』ではalsの例が全部で23例<sup>27</sup>挙げられており、そのうち今日の„als“の意であるケースが18例<sup>28</sup>と最も多い。以下にその一例を示そう。

- (22) und alser mich alsô begreif,  
do enpfienec er mich als schône  
als im got iemer lône. (Iw. 294-6)  
彼はこうして私の手をとると、  
神が彼にずっと報いてくださるようにと思うほど  
丁重に私を迎えたのでした。

ここでは一行目のalsが時の従属接続詞であり、そのあとのalsôは前の文で述べられた内容を指す様態の副詞である。さらに二行目のalsが三行目冒頭のalsと相関的に„so anständig wie“の意で用いられている。ところで、三行目のlôneは要求を表わす接続法である。

これに対して、未来における一時点が示される„wenn“の例も1例のみ見られる。

- (23) ouch tragent sî in vür iuch hin,  
sîne liebe gesellen,  
als si in begraben wellen,  
mînen herren, ûf der bâre. (Iw. 1246-9)  
また、彼ら、王と親しかった者たちが  
私のご主人様である王を埋葬する時には

---

27 Vgl. Benecke: Wörterbuch zu Hartmanns Iwein, S. 4f.

28 例(20)の他に 286, 640, 703, 1051, 2411, 3245, 3267, 3584, 3595, 3930, 3944, 4432, 4668, 4823, 4825, 6128, 6687.

彼を棺に乗せてあなたの前を  
通り過ぎて行くでしょう。

『イーヴァイン辞典』にはals schiereの例が2例<sup>29</sup>、またalsが因由のニュアンスを持つと考えられものが次の例を含めて2例<sup>30</sup>見られる。

- (24) dô er gâz und getranc,  
dô huopz gesinde grôzen schal  
ze bêden porten über al,  
als sîz im niht wolden vertragen  
der in den herren hete erslagen. (Iw. 1224-8)  
彼 [=イーヴァイン] が食べかつ飲んでいると、  
(アスカローンの) 家来たちが二つの城門のあちこちで、  
大騒ぎし始めた。  
自分たちの主君を殺した者を  
許すつもりはなかったからである。

クラーマーが4行目を „da sie es dem nicht ungerächt hingehen lassen wollten“ と因由の意味に訳しているように、ここは因由の意味とみるべきである。時の意味から因由の意味への移行についてダールは、時間的な前後関係は容易に因果関係と把握されるため、時から因由の接続詞への移行は容易に理解できる機能変化である<sup>31</sup>、と述べているように、どちらの意味であるかは前後の文脈によるところが大きいようである。

『イーヴァイン』におけるalsの用法は、例(23)(24)のような若干の例外を除けば、今日とほぼ同様であると言えるが、『ニーベルンゲンの歌』では20例<sup>32</sup>見られるalsのうち、„als“と„wenn“の比率は11対9とほぼ半々である。まず副文中の直説法現在と一緒に、条件の意味で用いられたalsの例を挙げてみよう。

---

29 3109, 6772.

30 例(24)の他に1480.

31 Dal, S. 208.

32 Vgl. Bartsch: *Der Nibelunge Nôt*, S. 9. C622, 1 はals schiereのケース

時、条件の副文を導入する *sô*, *als(ô)* について

(25) *als* ir uns gebietet, wir komen morgen fruuo. (NL. C 1863, 3)

さようなら、明朝早くに参ります。

一行目前行は別れの挨拶の定句であるが、文字通り訳せば「そなたが我々にお望みなら」と条件の意味である。またA, B写本ではここでも *als* が *swenne* と置き換えられており、*als* は „wenn“ の意である。『ニーベルンゲンの歌』ではこういった „wenn“ の例が (25) を含め 9 例<sup>33</sup> 見られるのに対し、過去形または過去完了形とともに今日の „als“ の意で用いられる例も 11 例<sup>34</sup> ある。

(26) *den* er *dâ* nennen *hôrte*, *dô* er *des* niht *envant*,

*dô* zurnde er ernstlichen, *als* er Hagenen sach. (NL. 1555, 2f.)

名乗りをあげたその人の姿が見あたらなかった時、

彼 [= 渡し守] はハゲネを見ると、激怒した。

一行目前行はうしろの指示代名詞 *des* にかかる関係文であり、後行の *dô* で導かれる副文に従属する第二級の副文が文頭に置かれた形になっている。関係文中の *dâ* は *den* に添えられて、関係代名詞の意味を強める機能を持つ<sup>35</sup>。 *des* は *niht* にかかる部分の 2 格で、二行目前行に主文が続く。さらにその主文に後行の *als* 文がかかるという複雑な構文である。二行目後行の *als* は A 写本では *dô* となっており、今日の *als* と同じ意味で用いられていることが分かる。

### 3. おわりに

それでは、ここまで見てきた *sô*, *alsô*, *als* の用例を意味別に一覧表にしてまとめてみよう。表中の数字は *sô sliumo (sô)*, *sô schiere (sô)* といった表現形式を除外したものである。

33 例(25)の他に、C328, 4. C737, 2. B1035, 2. 1135, 4. 1178, 2. C1584, 4. 1686, 2. 2239, 4.

34 例(26)の他に、167, 3. 908, 1. 938, 2. 958, 1. 979, 3. 1083, 3. 1181, 3. 1772, 3. 1808, 3. 2206, 1.

35 Vgl. Bartsch: *Der Nibelunge Nôt*, S. 47.

Tabelle 1

	sô	alsô	als
O.	97 wenn: 19 als: 88		
Iw.	16 wenn: 14 als: 2	0 wenn: 0 als: 0	21 wenn: 1 als: 18 weil: 2
NL.	34 wenn: 33 als: 1	14 wenn: 1 als: 13	20 wenn: 9 als: 11

Ahd.期のsôは本来「そのように」という様態 - 比較の意の副詞であったが、先行する文で述べられた出来事に、後続する文中の出来事が時間的に続くケースでは、後続文の先頭におかれたsôによって時間の前後関係が示されるようになった。従属接続詞としての機能は、様態を表わすsôに、同定の内容を示す文が追加され、その文にも同じようにsôが置かれることによって発生した。そしてこの様態の従属接続詞から、さらに時や条件の従属接続詞へとsôの用法が広がっていった。オトフリトの『福音書』では、sôは主に過去の一回限りの出来事を示す„als“の意で用いられ(88例)、現在や未来の時点、あるいは条件を示すことはこれよりもまれであった(19例)。しかし、過去の出来事が示される場合でも、オトフリトでは依然としてsô文を受ける相関詞として主文中に、あるいは時の意を補助、強調するものとして副文中にthô, sârなどが頻繁に置かれ、これによって様態のsôとの区別がなされた。

Mhd.期に至ると、sôにその意味を強調するalのついたalsô、その語末音が弱化したalse、さらに語末音が脱落したalsも様態の意味で頻繁に用いられるようになったが、時の意味で用いられることは比較的まれであり、オトフリトで盛んであった過去の一時点を示すsôの用法はもっぱらdôによって表現された。しかし『イーヴァイン』や『ニーベルンゲンの歌』では、こういった時や条件を表わす用法がsôやals(ô)に散見される。sôに関して言えば、『イーヴァイン』、『ニーベルンゲンの歌』ともに現在、

## 時、条件の副文を導入する *sô*, *als(ô)* について

未来の一時点「～する時に」、あるいは、ある一時点における行為の繰り返し「～する(した)時にはいつも」や条件が表わされる例が多いが(Iw.:14例, NL.:33例)、ごくまれに過去の一時点が示される例(Iw.:2例, NL.:1例)も見られた。*alsô*に関して言えば、『イーヴァイン』ではもっぱら様態の意味で用いられ、時に関する表現は見られない。これに対して『ニーベルンゲンの歌』における*alsô*は、14例中13例で過去の一時点を示し、ほぼ今日の„*als*“の用法に対応している。*als*に関して言えば、『イーヴァイン』では21例中18例がすでに今日と同じ用法であるのに対し、『ニーベルンゲンの歌』では、依然として„*wenn*“の意で用いられるケースが9例、„*als*“が11例とほぼ半数であり、その用法に大きな揺れが認められる。

このように、Mhd.期の*sô*, *als(ô)*が時や条件の従属接続詞として用いられることは比較的まれであり、これら二つの作品に見られる数少ない証例を比較しただけで説得力のある結論を導き出すことはもちろん不可能であるが、依然として用法上の揺れを示していた『ニーベルンゲンの歌』に比べれば、少なくとも『イーヴァイン』では、*sô*, *alsô*, *als*の機能分化が一段と進んでいたとすることができるだろう。

### 引用原典

- Otfrids Evangelienbuch*. Herausgegeben von Oskar Erdmann; 6. Auflage, besorgt von Ludwig Wolff (Altdeutsche Textbibliothek 49). Tübingen 1973.
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der siebenten Ausgabe von G. F. Benecke. K. Lachmann und L. Wolff, Übersetzung und Anmerkungen von Thomas Cramer. Berlin 1968.
- Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, herausgegeben von H. de Boor; 22. revidierte und von Roswitha Wisniewski ergänzte Auflage. Mannheim 1988.
- Dasselbe. Nach der Handschrift C, herausgegeben von Ursula Hennig. Tübingen 1977.

### 主要参考文献

- Der Nibelunge Nôt. Mit den Abweichungen von der Nibelunge Liet, den Lesarten sämtlicher Handschriften und einem Wörterbuche*. Herausgegeben von Karl Bartsch; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1880. Hildesheim 1966.
- Das Nibelungenlied*. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart 1997.
- Dasselbe. Paralleldruck der Handschriften A, B und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften, herausgegeben von Michael S. Batts. Tübingen 1971.

- Otto Behaghel: *Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung*. Bd. III. Heidelberg 1928.
- G. F. Benecke: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein*. 3. Ausgabe, besorgt von C. Borchling. Leipzig 1901.
- G. F. Benecke, W. Müller, F. Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch I-III*; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66. Hildesheim 1963 [=BMZ].
- Anne Betten: *Grundzüge der Prosasyntax. Stilprägende Entwicklungen vom Althochdeutschen zum Neuhochdeutschen*. Tübingen 1987 (Reihe Germanistische Linguistik 82).
- Ingerid Dal: *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. 3. Aufl. Tübingen 1966 (Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte 7, Ergänzungsreihe B).
- Oskar Erdmann: *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids*. 1. Teil. Halle 1874.
- Johann Kelle (Hrsg.): *Otfrids von Weissenburg Evangelienbuch. Text Einleitung Grammatik Metrik Glossar, III*; Nachdruck der Ausgabe 1881. Aalen 1963.
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 18. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka. Tübingen 1960.
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 24. Auflage, überarbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse. Tübingen 1998.
- Hermann Paul: *Deutsche Grammatik*. Bd.4, T.4: Syntax(Zweite Hälfte), unveränderter Nachdruck der 1. Auflage von 1920. Tübingen 1968.
- Paul Piper (Hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch. Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriss der Grammatik*. II. Theil: Glossar und Abriss der Grammatik. Freiburg i. B. 1887.
- Fritz Tschirch: *Geschichte der deutschen Sprache*. Erster Teil, 3. durchgesehene Aufl. bearb. v. W. Besch. Berlin 1983 (Grundlagen der Germanistik 5).
- Dieter Wunder: *Der Nebensatz bei Otfrid. Untersuchungen zur Syntax des deutschen Nebensatzes*. Heidelberg 1965.

## *Sô* und *als(ô)* als Einleitungen temporal - konditionaler Nebensätze

Kan NAGANAWA

Seit ältester Zeit vereinigt die Partikel *sô* die hinweisende Funktion mit modaler Bedeutung, kann also, anaphorisch auf einen vorausgehenden Satz oder auf ein Satzglied verweisend, die Ähnlichkeit oder die Identität mit diesen zeigen. Diese ursprüngliche Gebrauchsweise bleibt immer noch die zentrale. Das Adverb *sô* konnte im Althochdeutschen eine zeitliche Folge zwei parataktischer Hauptsätze zeigen, wie im folgenden Beispiel.

*Was siu after thiu mit iru sâr thrî mânôdo thâr;*  
*sô fuar si zi iro selidôn mit allên sâlidôn.* (O. I 7, 23f.)

Der Gebrauch von *sô* erweitert sich und kann weiter als Nebensatzeinleitung nicht nur in modal-vergleichender, sondern auch in temporal-konditionaler Bedeutung verwendet werden. Im letzteren Falle kann *sô* sowohl für den einmaligen Zeitpunkt der Vergangenheit wie für zeitlich wiederholte, vergangene Ereignisse gebraucht werden. Bei Otfrid findet sich diese Partikel 88mal in vergangener temporaler, 19mal in temporal - konditionaler Bedeutung.

In der temporalen Bedeutung steht *sô* in Konkurrenz zu *thô* und in der konditionalen zu *oba*. Bemerkenswert ist hier, dass das Verhältnis von temporalem *sô* und *thô* bei Otfrid 91 gegen 77 ist, obwohl *thô* im Ahd. ein allgemeineres Mittel für Einleitung der Temporalsätze ist, während bei konditionalen Sätzen *sô* und *oba* im Verhältnis von 23 gegen 99 stehen.

Nach I. Dal bezeichnet *sô* im Mhd. außer Modalität Gleichzeitigkeit und Bedingung. Im Mhd. entwickeln sich aus dem *sô* neue Wortformen: *alsô*, *alse* und *als*. Die Wortform *alsô* entsteht durch das Vorsetzen des

verstärkenden *al* an *sô*. *alse* ist die abgeschwächte Form von *alsô*. *als* ist von *alse* wegen der Apokope entstanden. Diese drei Wörter haben eigentlich die gleiche Funktion wie *sô*, d.h. die als Modaladverb oder vergleichende Konjunktion, aber im Mhd. sind diese Wörter als Subjunktion nicht immer ersetzbar, sondern beschränken sich langsam auf ihre eigene Bedeutung.

Das temporale *sô* wird in den Bedeutungen „als“ und „wenn“ gebraucht, während *alsô* und *als* mehr in der Bedeutung wie *swenne* verwendet werden. *alse* wird im Iwein und im Nibelungenlied immer in der modal-vergleichenden Bedeutung benutzt, obwohl es in den beiden Werken nur wenig belegt ist (im Iwein dreimal und im Nibelungenlied einmal).

*sô* als temporale Konjunktion wird sowohl im Iwein als auch im Nibelungenlied meistens in der Bedeutung „wenn“ gebraucht. Was *alsô* betrifft, steht es im Iwein nie als Konjunktion im Nebensatz, sondern immer als Modaladverb im Hauptsatz, während es im Nibelungenlied einmal als „wenn“ und 13mal als „als“ belegt ist.

Das apokopierte *als* ist im Iwein zweimal als Kausalkonjunktion „weil“ belegt, aber meistens schon als temporale Konjunktion verwendet: 18mal „als“ und einmal „wenn“. Im Nibelungenlied steht es dagegen 9mal in der Bedeutung „wenn“ und 11mal „als“. Nach diesem Befund kann man folgern, dass *als* im Iwein dem Nhd. einen Schritt näher tritt, und die Funktionsverteilung von den drei Wörtern noch durchgängiger als im Nibelungenlied ausgeführt ist.